

〈書評特集〉

丹治信春著

『言語と認識のダイナミズム —— ウィトゲンシュタインからクワインへ』

---

内容紹介と質問一つ<sup>\*)</sup>

野本 和幸

まずはじめにお断りしておかなければならないが、現在の私には丹治氏のこの労作を本格的に検討する余裕がないので、本稿は、まだ本書に目を通していない読者のための概略的な内容紹介が主になっている。しかし後半で、丹治氏の「全体論的言語観」についての確認質問を付加してある。

1 内容紹介

さて本書の中核となるアイディアは、十数年前のオックスフォード留学中、今世紀後半の英国を代表する哲学者M. ダメットとの二年間の討論の中で得られたものだそうで、その骨子は既に英文論文として“Quine on Theory and Language”（東京都立大学『人文学報』第161号、1983）に、またその短縮版が権威ある国際誌 *British Journal for the Philosophy of Science* (vol. 40, no. 2, 1989) に掲載され、内外の注目を集めた。本書は、しかし「あとがき」で述べられているように、その後何年にもわたり、引き続きウィトゲンシュタインと現代のアメリカを代表する哲学者クワインを相手に考察を続けてきた著者の、現時点での「中間決算」だということである。

本書のテーマは、われわれの科学的ならびに日常的な認識の営み（知る、考える、推測する、疑う等）における言語の機能、言語理解とはどのようなものであるか、とりわけ科学的・日常的認識が進展し、変化していくダイナミックなプロセスにおける言語の機能、言語理解のあり方に、焦点が当てられている。従って本書は、「言語哲学」の書であるのみならず「認識論」

<sup>\*)</sup> なお、上記丹治氏の著作は「本書」として引用する。

でもあり、かつ「科学哲学」の書でもあるというユニークなものである。

第一章、第二章は、ウィトゲンシュタインの言語観の批判的検討に当てられ、第三章、第四章では、クワインの全体論的言語・知識観が批判的に検討されつつ、丹治氏の中心的アイディアである独特な「言語の同一性規準」と「補償の原理」とが提案され、最後の第五章で残された問題点の検討とまとめが行われる。

丹治氏は後期ウィトゲンシュタインの言語観、すなわち、ことばが有意味なのは、チェスの駒がチェスというゲームの中でのみ意味を持つように、ことばはわれわれの生活の中でその使用法を規定する規則の体系によってなのだという「言語ゲーム」の考えを必ずしも否定はしない。だが、「言語規則・文法と経験的命題」「意味と事実」とを峻別するウィトゲンシュタインの二分法や、意味を規定する「規準」と、事実に・経験的証拠である「徴候」とを明確に区別することには、丹治氏は反対である。氏は複数の規準の対立や規準と徴候との揺れ動きを詳細に検討し、「意味・文法と事実」という二分法が成立しないことを論証する。

一方丹治氏は、ウィトゲンシュタインの最晩年の遺作『確実性の問題』において提唱された「世界像」（例えば「地球は私が生まれるずっと前から存在していた」のような、われわれがそれをいわば「鵜呑みにして」、その他一切の日常的・科学的探究がそれに基づいて行われる根本的信念）という考えに賛成する。クワインにも見られるこの考えを、丹治氏は「体系の把握」「像を描くこと」による言語理解と呼び、信念体系・理論体系のネットワークの中に様々な言語表現を結節点として位置づけるこの言語理解を、さらに発展させようとする。しかし晩年のウィトゲンシュタインには世界像命題を個々に取り出して一種の文法的規則と見なし、他の経験的命題と対比させる二分法と原子論的発想とが依然根強いことを指摘し、こうした発想が、ダイナミックな言語理解を阻害すると、丹治氏は主張する。ウィトゲンシュタインというと、信奉するか、毛嫌いするかのいずれかの態度がとられる通弊があるが、丹治氏は、取捨いずれについても周到な議論を展開し、公平な批判的検討を行っていることは、注目に値する。

本書の後半では、丹治氏はクワインの考えを発展させ、「体系の把握」による言語理解を分節化し、擁護しようとする。しかも信念体系・理論体系自身は、歴史と共に変化するものであり、そうした歴史的な変化というダイナミックなプロセスのただ中においても、言語は変化を部分的に含みつつも連続的に「理解」され続けている。こうした「言語理解」を擁護するために、

丹治氏は「言語の同一性は推移律を満たさない」という、一見自己矛盾的なテーゼを提唱する。また「補償の原理」の要請によって、科学革命における理論変化や「分析的命題」の特徴付け、また「観察の理論負荷性」をも自然な仕方で説明しようと試みている。

クワインは、「経験主義の二つのドグマ」(1951)という論文において、第一に、分析的真理と総合的真理——意味と事実——の区別を退け、第二に、各経験的命題を特定の直接経験に還元する「還元主義」を否定し、われわれの知識・信念は一つの体系的連関を成しているとの全体論的な(holistic)知識・言語観を提案した。そしてわれわれの現在の「信念体系」に不都合な経験が生じた場合の、体系の改訂の仕方はいくつもあり、論理学を含むすべての命題が改訂可能だとの平等主義を主張した。体系の「ふち」に近い命題とは、体系を乱すまいとするわれわれの「保守主義」からみて、比較的改訂されがちな命題にすぎない。しかし、改訂可能性の自由度が大きく、しかも改訂が各人に依存するとすれば、コミュニケーションに必要な言語における一致と安定性は低下せざるをえないであろう。

そこで後期クワインは、『ことばと対象』(1960)において、言語の社会的性格を強調し、言語を社会的技術(social art)と見なして、コミュニケーションに必要な固定性を確保する。また、同じ言語共同体のメンバーであるための資格基準・言語の同一性基準として、「対話の一般的な円滑さ(fluency)」を導入する。「対話の円滑さ」が可能になるのに十分なだけ、その言語共同体のメンバーに共通の言語的ふるまいのパターンを身につけるということが、当の言語の習得・理解ということである。また、そのメンバーが無条件に肯定する文には、その共同体の「共有的な信念」を表現する文が含まれるから、言語習得・理解は、その言語共同体のメンバーの「共有信念」の受容と切り離せない。しかしすると、共有信念や理論の僅かの改訂変化も、言語の変化ということになってしまう。他方、理論や共有信念の改訂は、主に論証、考察、討論といったプロセスで行われるが、その間「同じ言語」が使用されていなければ、「多義性の誤謬」に陥るであろう。これがダメットにより提起されたクワイン批判としての「言語変化のパラドクス」である。これは、言語の改訂可能性というダイナミックな側面と、コミュニケーションに必要な言語の固定性との調和をどうはかるかの問題である。

クワインにこの問題に対する明示的な回答はないが、有力な示唆はある、と丹治氏は考え、それを発展させようと試みる。クワインの言語の同一性基準は、「対話の円滑さ」であったが、丹治氏が注目するその重要な特徴は、

「推移律」を満たさない（従って、正確には「準—同一」）ということである。つまり、言語 $L_1$ の話者と言語 $L_2$ の話者との間に円滑な対話が成り立ち、 $L_2$ の話者と $L_3$ の話者との間にも円滑な対話が成り立っても、 $L_1$ の話者と $L_3$ の話者とは円滑な対話が成り立たないことがありうるのである。さて言語の準—同一性や変化という場合、先の $L_1$ と $L_2$ 、 $L_2$ と $L_3$ のように隣合った段階同士が「準—同一」であれば、「内的観点」から見ればどこにも「言語の変化」は起こっていない。他方両端の $L_1$ と $L_3$ を直接比較したときに円滑な対話が成立しなければ、「外的観点」からは「言語の変化」が認められると見なすのである。「言語の変化」は、このように、観点に相対的にのみ語りうる、というのが丹治氏の主張である。

こうして緩やかな通時的変化と同一は説明されても、科学革命のような短期間の急激な理論・信念の変化は、どう説明されるのか。丹治氏の提案は、「補償の原理」、すなわち、「共有信念からの逸脱による対話の円滑さの低下は、その言語共同体のメンバーに共通の言語的ふるまいのパターンの残りの部分に合致する形で、十分な説明や論証によって補償されるべし」という要請である。

この要請は、「分析的命題」や「観察の理論負荷性」の問題にも適用可能である。「独身者」の最終根拠が「結婚していない」という唯一の基準にある（一基準語）とすれば、「独身者は結婚していない」はその否定が不可能な「分析的命題」であろう。しかし複数の基準を持つ語や、「電子」のようにいくつもの法則が基準として束をなす「法則集約語」は、改訂可能である。「補償の原理」によれば、そうした基準の改訂は、他の残りの基準を足場にしてなされるのである。また「原子」が「分割不可能」という一基準語から現在のように法則集約語へとダイナミックに変化する場合も、内的観点からは「準—同一の言語」中での認識の進展・理論の変化と見られ、かくして科学の発展の可能性は、法則集約語を含む命題の改訂可能性によるわけである。

社会的に共有された信念を表す文との結びつきをもつ観察文は、信念・理論負荷的であり、さらには体系の変化によって観察報告の仕方も変化するから、ダイナミックな言語理解に立てば、純粋な観察文でさえ改訂可能となりうる。

しかし以上のような「全体論的言語観」では、一つの文を知るにもその言語全体を知らなければならないから、当の言語の習得可能性を説明できないのではないか、というダメットの批判に対し、丹治氏の示唆は「理解」に程

度を許し、「部分的理解」のような中間段階を認めようというものである。

また最後に、準一同一な言語に非推移性を認めた場合、「言語共同体」はどう規定されるのかという問題が残る。丹治氏の提案は、例えば方言系列を成す隣合った三つの集落A,B,Cの話者は、直接隣合った集落の話者同士(AとB, BとC)は円滑に対話ができる(従って内的観点からはAとB, BとCに属する話者はそれぞれ互いに同じ言語を話している)が、AとCの話者同士は円滑な対話ができない場合、Bの話者はA+BとB+Cとの二つの言語共同体に属し……というように、各集落の話者は準一同一の言語を話しつつ、隣合い重なりあった複数の言語共同体に属すると見なそうという興味深いものである。

以上のように、本書において、丹治氏は、ウィトゲンシュタインに対する周到な批判的検討を経て、クワインの示唆を「言語の同一性の非推移性」と「補償の原理」というアイディアによって進展させ、「像を描くこと」「体系の把握による」言語理解に内実を与え構造化を施すことにより、日常的ならびに科学的認識の進展・変化を通じてのダイナミックな言語理解を、シャープな分析力と粘り強い批判的な議論によって、しかも明晰・平明な文体で、描き出している。本書は、何度か来日し、またかなりの数の日本の哲学者がその膝下で学んだにもかかわらず、論理学者としてのみ遇されることの多かったクワイン哲学の全体を、本格的に検討し批判的に発展させている点でも、また日本の哲学界に決定的に欠けている哲学的議論のありうべき一つの姿を示した点でも、近来稀な斬新かつ独創的な貢献であると思う。

## 2 「全体論的言語観」について

先述の通り、いまの私には丹治氏の周到でチャレンジングな労作を十分検討する時間的余裕がない。しかししばしば人びとの話題にのぼりながら、必ずしも自明とはいえない「全体論」なるものについていわば確認のための質問に限りいくらか記してみたい。すなわち、丹治氏も基本的に支持する「全体論的(holistic)な言語観」の内実とは、どのようなものであるのかということである。丹治氏は、「体系の把握」による説明中で、その事例として、様々な「常識の体系」(本書, pp. 121-123)を挙げ、また特に「理論的な科学における言語理解」に言及している。(本書, pp. 123ff.) すなわち、「直接の観察にはかからない「対象」からなる構造、あるいは法則的連関のネットワークを措定(posit)し、そしてこの世界を、そのような構造を組み込んだものとして描き出すことである。」(本書, p. 123) そうした理論のネット

ワークの全体の中で「電子」ということばを用い、電子についての仮説を提起したり、観察可能な現象の予測をしたりするといった形で、「電子」ということばや仮説を「使う」ということが、理論科学における言語理解だとされる。(本書, pp. 125-127) すると「電子」といった理論的語句やそれを組み込んだ仮説についての、科学者集団における(さらには言語的分業と協業によるより広い言語共同体における)共通の言語的ふるまいのパターンがあることになる。

さて丹治氏は、ウィトゲンシュタインの「世界像」という考えに、この「像を描くこと」や「体系の把握による」言語理解(本書, pp. 120ff.), つまり、信念体系・理論体系のネットワークの中に言語表現を位置づけるという形での理解への示唆を認めつつ、なお次のような不満を漏らす。「複数のことば、複数の事柄の間の関連……そうした関連性、全体性に、彼〔ウィトゲンシュタイン〕が十分な考慮を払っていないように思えることである。つまり、言語理解についてのウィトゲンシュタインの考えは、一つ一つのことばや文を、さらにはまた、特定の状況におけるそれらを、単独で考えようとする、「原子論的」傾向が強すぎるように思われるのである。」(本書, p. 60) 「すなわち、ある事態(例えば痛み)とある現象(例えばふるまい)との間の関係を単独で取り出して、それが「文法的な関係」であるか否かを問う(「規準」という考え)、とか、一つ一つの命題をそれぞれ単独で取り出して、それが「文法的規則」であるか否かを問う(「世界像」という考え)、という考え方そのものに、困難の原因があるのではないか、ということである。われわれの言語理解は、いわばもつと根深く体系性を帯びている。」(本書, p. 146)

先の「像を描くこと」「体系の把握による理解」という、同じ言語であるためのグローバルな制約の下で、丹治氏は、言語の理解・習得を、クワイン流にその言語共同体のメンバーに共通の言語的ふるまいのパターンを身につけることだと見なし、また言語の同一性基準をこうした共通の言語的ふるまいに基づく「対話の一般的な円滑さ」に求めている。しかし一方でやはりクワインに従い、言語的ふるまいのパターンは、例えば、「どのような状況でどのような文を発話するか、あるいはどのような問いかけに対してどのように肯定や否定の反応をするか、どのような推論を認め、あるいは認めないか、等々のパターン」(本書, p. 167)に分節可能であると見なされている。言語的ふるまいのこれらの共通のパターンは、言語論的には「音韻規則」「意味論的規則」「統語論的規則」「推理規則(変形規則)」等と呼ばれてもおかし

くはないものであろうし、より細かくは一つ一つの文や語に関して異なる言語的ふるまいの共通のパターンが識別されるはずであろう。なぜなら、第一に、「外的観点」からは「言語変化」が認められるとしても、「内的観点」からはどこにも「言語の変化」が起こっていないという、「推移律」を充たさない言語の準一同一性が認められているからである。実際丹治氏は、「ノイラートの船」の比喻に言及し、理論・信念の改訂変化の「連鎖の各ステップではどこを改訂してもよいが、しかしその都度、他の大部分を保存する、というのが、言語の安定性をグローバルな「保守主義」によって維持するということが……、言語が「流通しつつ変化する」ことのメカニズム」（本書、pp. 200-201）だと主張する。また第二に、短期間における科学革命の場合にも、そうした準一同一な言語においては、急激でダイナミックな変化があるとしても「補償の原理」が有効に作動しうる限りは、そうした言語を習得しているメンバーには、変化する言語的ふるまいのパターンからは独立に、準一同一性と補償の原理を支えるに十分な安定した言語的ふるまいの、分節されたパターンの共通性がなければならないであろうからである。（本書、pp. 202ff.）

すると丹治氏のいう「全体論」は、(i) 一つの文・語を理解するにも言語全体を理解していなければならず、僅かの共有信念、言語的ふるまいのパターンの改訂変化も言語の変化と見なすような極端な「包括的全体論」ではないように思われる。こうした極端な全体論には、部分的な改訂変化を許容する「保守主義」の余地がないから「補償の原理」は有効でないはずであり、「内的観点」と「外的観点」との齟齬はありえないであろう。（あるいは、言語的ふるまいのパターン変化には言語変化を来さないネグリジブルなものと、そうではないものとがあるのであろうか。）

(ii) もし以上のことが認められるとすると、私の質問は次のようになる。すなわち、部分的改訂変化を許し、「補償の原理」の有効性、「言語の非推移的同一性」を認める丹治氏の全体論とは、私が「穏健な意味全体論（mild meaning-holism）」<sup>1)</sup>と呼んでいるものと（丹治氏の忌避する「意味」などの用語を「言語的ふるまいの共通のパターン」などに適当に置き換えた上で）重なり、かつ以下で述べるような構造化を含みうるものであろうか、ということである。私のいう「穏健な意味全体論」とは、まずは文や語の潜在的な

1) Nomoto, K., 'Davidson's Theory of Meaning and Fregean Context-Principle', *From The Logical Point of View*, 93/1, Prague (邦訳は拙著『意味と世界——言語哲学論考』第6章に所収、法政大学出版局、1997.)

意味論的（ないし共通の言語的ふるまいの）相互関連性，ないしエヴァンズ的な「一般性制約（generality constraint）」<sup>2)</sup>にコミットするものである。つまり，例えば，‘Fa’ という文の理解には，‘Fb’，‘Fc’，……といった型の文の理解と，‘Ga’，‘Ha’……という型の文の理解とが結びついていなければならない。単独の孤立した文の理解というものはありえないのだということである。ほとんど同じことをウィトゲンシュタインも，「‘ $\phi(a)$ ’ が命題なら，‘ $\phi(b)$ ’ も命題で，‘ $\phi( )$ ’ は一つの体系を形成する。同様に ‘ $\phi(a)$ ’ も ‘ $\psi(a)$ ’ を前提する」と認めていた<sup>3)</sup>。こうしたいわば「統語論的な部分的体系性」，さらには色彩語，形態語その他のある範囲の表現はひとまとまりの部分系内でのみ理解可能であるとか，性格と行為間でのように，あるタイプの文の理解には既に他のあるタイプの文の理解が必要だといった「依存関係」が，言語中に半順序的な「階層構造」を課すというダメットの主張を含めてもよい。その場合でも，ダメットは例えば，「AまたはB」の理解に「AならばB」の理解は不必要だと述べているし<sup>4)</sup>，色彩語系と形態語系も互いに恐らく独立であろう。理論科学の場合でも「ノイラートの船」の保守主義や「補償の原理」が有効であるためには，言語的ふるまいのパターンの改訂変化する部分と言語の安定性のために保存されている部分とがなければならない。そしてこうした程度までの相互独立的な部分的体系性や関連性であれば，「分子論者」でも賛成しうるであろう。

実際デイヴィッドソンは，「フレーゲは文という脈絡中においてのみ語は意味をもつと言った。同じ調子で彼は，言語という脈絡中においてのみ文は（またそれゆえ語も）意味をもつ，と付加してもよかったかもしれない」<sup>5)</sup> と言い，フレーゲの文脈原理を一種の全体論に拡張して，分子論的言語観と全体論的言語観を程度の差として連続的に考えているように思われる。

またデイヴィッドソンは，全体論が，文の構成要素表現の意味は他の文中においても同一の体系的役割を演じ，同じ貢献をするということを前提していると，解していると思われる。「理論の働きは，各文の既知の真理条件を，他の文中に現れ，かつ他の文中で同じ役割を果たしうるその文の諸側面〔単語〕に関係づけることである」<sup>6)</sup>と述べているからである。実はフレーゲ自

2) Evans, G., *The Varieties of Reference*, pp. 100ff.

3) Waismann, F., *Ludwig Wittgenstein and the Vienna Circle*, 1979, p. 90.

4) Dummett, M., *The Logical Basis of Metaphysics [LBM]*, p. 233, 1991.

5) Davidson, D., ‘Truth and Meaning’ [TM](1967) rep. in *Inquiries into Truth and Interpretation* (1984), p. 22. (野本訳「真理と意味」(『真理と解釈』所収) 勁草書房)

6) Davidson, D., [TM] p. 25.



身も既に全く新しい思想の表現可能性・理解可能性は、「文の意義を語に対応する諸部分から構成するということに基づいている。二つの文章中に同じ語、例えば「エトナ」を見いだすならば、また対応する思想に共通のなにかを認めるのである。こうしたことなしには、本来の意味での言語は不可能であろう。」<sup>7)</sup>と主張しており、いわゆる「言語の創造性」の根拠を「合成原理」に求めていたのであった。つまり、(言語のある一断面をスタティックに見た場合) 語の意味(ないしはその語に対する共通の言語的ふるまい)は、(それが共有されている限り) 単に一つの文の意味(ないしはその文への共通の言語的ふるまい)に貢献するだけでなく、その言語中でその語が再登場する他のすべての文の意味(ないし関連する共通の言語的ふるまい)にも同じ貢献をするわけであり、そのことが合成性を保証するのである。

だがもしある言語共同体がいままで古典論理を採用していたのに、ある時期から直観主義的論理に制限することになったと仮定すると、従来認められていた排中律、二重否定律、背理法といった公理や推論法則(ないしそれに相応する言語的ふるまいのパターン)は認められなくなるであろう。その場合には、「否定詞」の意味(ないしそれに対する言語的ふるまいのパターン)が変わったというべきであろう。また逆に、直観主義的論理から古典論理へと変わる場合の変化は、ダメットのいう「保存拡大 (conservative extension)」(つまり、元来の理論中で証明可能でない言明は、新理論中でも証明可能でない)<sup>8)</sup>ではなく、例えば「否定詞」の直観主義的な意味はそのまま保存されはしないのである。デイヴィドソンの意味理論は、古典論理を前提にしたもので、その限りにおいて各語が当の言語中で同じ意味論的役割を果たすと言えるのであり、かなり基本的なパラダイム変換である論理の変化といったダイナミズムを組み込んではいない<sup>9)</sup>。

このようにスタティックで、また言語論に限定されてはいるが、「文の諸部分は、それが現れる文の意味に体系的に貢献する」と認めるデイヴィドソンは、さらに一步踏み込んで、「この洞察が指し示す一つの方向は、意味についてのある全体論的な見解である。もし文がその意味に関してその構造に

7) Frege, G., Philip E. Jourdain宛の書簡(日付なし。1914年前後か) in *Wissenschaftlicher Briefwechsel* (Hrsg. von Hermes et al.), S. 128, 1976.

8) Dummett, M., [LBM] p. 218.

9) 近年デイヴィドソンも、「先行 (prior) 理論」と「経過 (passing) 理論」といった区別を導入してある種のダイナミズムに触れはじめてはいる。(Davidson, D., 'A Nice Derangement of Epitaphs' in *Truth and Interpretation* (ed.) LePore, E., 1986)

依存しており、かつその構造中の各名辞の意味を、それが登場する文の全体から抽出したものとのみ解しているなら、どの文（および語）も、その言語中のすべての文（および語）の意味を与えることによってのみ、与えることになる。……この程度の全体論は、適切な（adequate）意味理論が「sはmを意味する」という形式のすべての文を含意しなければならないという示唆のうちに、すでに暗黙に含まれていたのである」<sup>10)</sup>と主張している。「適切性条件」とは、本質的にタルスキのT規約であり、それはある言語L中のすべての文の(T)文が定理として次の公理シエマ：

(T) sがLにおいて真なのは、pの場合その場合に限る。

から導出されるべきことを要求するものである。このことが所与の文の意味を確定可能にする。それは言語L中の各文の(T)文の証明がその再帰的構造に依存して遂行されるからである。もしそうだとすれば、各文の論理構造が他の文との（論理的帰結関係を含む）論理的相互関係を確定する。こうした各文の再帰的論理構造が、言語全体の意味論的空間において、各文がどのような位置を占めるかないし役割を演ずるかを説明する。以上の程度のデイヴィドソンの意味理論は、私のいう「穏健な意味全体論」に納まるものである。（デイヴィドソンの意味理論・解釈理論が「穏健な全体論」に終始するものかどうかはいまは問わない。）

さて問題は、丹治氏のいう「体系の把握による理解」という意味での全体論が、（ある言語の一断面をいわばスタティックに見た場合に）その言語の文や語の意味（必ずしも真理条件的意味論にコミットする必要はなく、語や文に対する共通の言語的ふるまいのパターンでよい）の以上のような部分的体系性、相互識別的な一意性と再帰的論理構造（共通に認められるのが古典論理的か構成主義的かは問わない）に基づく相互連関性という意味での「穏健な意味全体論」に重なり、かつ上記のような構造化を含みうるものなのかどうかである。

もし丹治氏の「全体論的言語観」が以上のような「穏健な意味全体論」（私が現在コミットしうる全体論はこの程度までの穏健なものである）に重なり、そうした構造化を組み込み可能なものであるとするならば、従来の意味理論がいわばスタティックにある言語（形式的論理的言語や自然言語断片）の通時的・共時的な一断面を捨象して取り出していたものであるのに対し、丹治氏の試みは、理論科学の言語も含み、かつ科学革命を射程に入れた通時

10) Davidson, D., [TM] p. 22.

的・共時的な言語変化と同一性のダイナミックスを考慮した言語理解として大変興味深いものであると、私には思われるのである。

また丹治氏が「言語の部分的理解」「すこしずつの理解」ということで、全体論的言語観に立っても「言語の習得可能性」を説明しようとする場合の、「部分的理解」も、先述の極端な「包括的全体論」とは両立が困難のように思われる（なぜなら、一単語の「部分的理解」を容認しながら、言語理解の理論としての「包括的全体論」を主張するポイントが分からないからである）が、以上のような「穏健な全体論」とは両立可能なものであろう。「部分的理解」とは、一つの「文や表現を使って「円滑な対話」を行なうために必要な、社会的に共有された言語的ふるまいのパターンを、少しずつ身につけてゆくこと」（本書、p. 279）、つまり、一定の言語共同体における共通の言語的ふるまいを身につけていくに当たっての試行錯誤的なプロセスを意味していると考えられるからである。のみならず、「穏健な全体論」を容認しても、ある文や語とそれ以外の他の語や文との部分的な体系的連関性や論理的関係をはじめから見通して理解している（記号を使用している）わけでは必ずしもないから、そうした部分的な連関性を徐々に理解していくということはいわば通常のことである。また、複合的表現の構成要素と構成法を理解している場合、「合成原理」に従えば、その複合的表現を潜在的に理解可能・使用可能ではあるが、現実にはいまだその表現そのものの理解や駆使には達していない場合といったいろいろの理解の程度が考えられる。さてすると、認識に関わる場面に限定しても、「言語理解」自体がなにかという振り出しの問題に戻ることになるのかもしれない。「言語理解」とは、ウィトゲンシュタインの強く否定した一種の心的過程（mental process）（ないし現にその語や文を使用してみせること）なのか、それとも潜在的な傾性的（使用）能力（ability）なのか。後者の理解能力が潜在的に所有されていても、現に分かっているとはいえない（未だその記号を現に然るべく使用できない）ケースは大いにあるであろう<sup>11)</sup>。

11) ダメットは、「言語理解」に 'occurrent/dispositional' の区別を導入している。（See. Dummett, M., *Origins of Analytical Philosophy*, ch.10, 1993.）